

# 北 陸 の 引 札 考

森 嘉 紀

## 1. 引札

「引札」は現在では死語に近く、言海、広辞苑<sup>(1)</sup>などに項目として見ることは出来るが、日常語としては完全に使われなくなった。

便宜的に引札は、現在のチラシと同じであるといえは簡単だが、正確とはいえない。

引札が江戸時代以降使われていた状況に立ってみなければ正確を期せない。

引札は広告媒体として、現在のチラシと同じように、デザインされた摺(刷)物であるが、その使用に当っては、手渡し、持歩き配る、宛名広告として、或は又店頭などに貼付するなど、多様な方法がとられた様であり、現在のチラシと全く同一物とも言えない。

引札が言葉としてチラシに転化してゆくのは、大正末期頃とみられる。上方では江戸より早くからチラシといわれていた様である<sup>(2)</sup>

## 2. 引札の出現

広告媒体として引札が発生する以前は、職商家の目じるしとしての看板、暖簾が固定的な広告媒体としての機能も果していた<sup>(3)</sup>デザイン的にも興味深いものが多く、現存するものも少ない<sup>(4)</sup>

引札の出現は18世紀の初め頃、江戸の商家の安売広告が初めとみられている。

引札についての文献は乏しいが、広告史上有名な、享保3(1718)年手柄岡持の「後はむかし物語」<sup>(5)</sup>に「寿の字越後やが安売りの引札せし事あり、花色暖簾の寿越後やと段々後鬚被成下という文言などを其頃はよほど洒落たる口上書に取扱たり」と記している。広告コピーの評をしている中にその様子的一端が知られる。また、加藤曳尾庵の「我衣」<sup>(6)</sup>では「茶の小売、畳の表方、礼綿、蒸籠入饅頭まで安売札廻しの事は宝永(1704～

1711)頃よりたまたま有之、正徳(1711～1716)にも有之、享保(1716～1736)より二季に札まわす。宝永以前は是等の儀は無之由」とある。これでは、安売札廻しであること、引札は宝永頃から始ったことと、二季に札廻すとあるので、夏冬二回札廻しをした事が知られる。さらに根岸守信の「耳袋」<sup>(7)</sup>では「右薬を口哲平蔵五十嵐共に手伝ひ撰分け、引風の薬を拵、諸々の風を払ふといふ心にて、諸風散と名目を付け、其頃は未だ引札などと申事のなき折から、委細に風を治する訳を認め、始めて辻々に引札致し、八錢より百錢迄に売りけるに、折ふし風流行して夥しく売りける故、俄に平六身上大きくなり、云々」とある。この「耳袋」は寛政11(1799)年～文化9(1812)年に完成しているので、寛政乃至やや以前の事情らしい。「辻々に引札いたし」とあって当時の使用状況がうかがわれる。

「我衣」では「宝永以前は是等の儀は無之由」と述べているが、天和3(1683)年には越後屋が日本橋駿河町に開店した時の有名な「現金安売掛値なし」の引札がある。近代経営上、画期的といわれる現金安売の初めの時のものである。

越後屋の使用例は、特殊例であったとも考えられる。

いづれにせよ引札は、当時の広告媒体として、重要なものであった。

江戸では著名な文人などが広告文を執筆する様になり積極的な広告政策がとられた事は広告史上割目に価する。

「土用の丑の日」にうなぎを食べる習慣も、平賀源内の広告文から定着したといわれる<sup>(8)</sup>黄表紙本の式亭三馬と戯作者たちの執筆、さらに嘶し家、歴史小説の柳亭種彦なども書いて、コピーの重要性の認識の上で新機軸が開かれていった<sup>(9)</sup>

又、山東京伝、曲亭馬琴、十返舎一九などが黄表紙景物本を執筆し、商店名や商品を巧妙に入れている。

広重の「東海道五十三次」には、仙女香の「びら」のかかった図も見られる。タイアップの有無は不明だが、広告活動の盛んさがうかがわれる。

芝居の広告は、現在のポスターのように、辻番付として、床屋、浴場など人の集るところに貼られ、一部は茶屋から客筋に配られたという<sup>(10)</sup>

明治初期の事情について宮竹外骨の著「文明開化」<sup>(11)</sup>によれば、明治4年の新聞の広告欄名に引札と名付けた広告があり、同11年には広告を主とした引札新聞が出来、又同年に大阪で引札広告という隔日刊行のものが出来たことが知られる。

### 3. 引札の調査

金沢を中心として、北陸三県の引札を収集家に当てて調査したが、各県の事情がかなり異っている。福井、富山県は戦災により灰燼に帰し、さらに福井は大地震(昭和23年)、に見舞われ、後遺症として一ヶ月後大水害に会うという最悪の状況で、引札の残存数は極めて少い<sup>(12)</sup>

富山、福井県に比して石川県は非戦災の上、大火、地震もなく、収集家も多く残存するものが最も多い。

調査した概数は

引札(開店、移転披露、商品目録、年賀状など)約450枚

びら(薬、化粧品)約20枚

商標(薬)約20枚

一枚ものの摺物(売薬、化粧品)約30枚

芸能関係の引札類(芝居、廓の催し、相撲案内など)約50枚

暦(主としてイラストの入ったもの)約40枚  
計約610枚である。

この調査では、北陸地域の大コレクションと見られるものは、ほとんどすべてを尽したと思うが、今後さらに発見されるものを期待している。

引札を、被見させていただいた調査先は公立

機関4ヶ所、個人、会社22ヶ所であり、個人が収集されたものが、その大部分である。収集家の収集動機、由来のはっきりしたものは次の通りである。

1. 公的機関のものは個人の寄贈による 2件
2. 土蔵の中から自家のものをたまたま見つけた 1件
3. 職業上何となく集った 2件
4. 自家の先祖のものなので知人に分けてもらった 2件
5. 風俗や事象に興味を持っていたので永年の間に無理なく集った 1件
6. 古いもの一般に興味を持って収集した 1件
7. 郷土史、医学史、印刷史などの研究と併行して集めた 9件
8. 広告学史研究上から 1件

5～8の方々は、いわば積極的に意義を見つけて収集、保存されてきたもので、保存状態もよく、系統的に整理しておられる事が多い。

いづれの方も永年にわたる収集者が多く、収集歴50年余という方も三、四名おられる。それぞれに愛措、愛情が感じられ、さらに研究心もうかがえ敬服した。

個人収集家の方々は、引札のみの収集に限るという事ではなく、関連の摺物類(暦、地図など)、書籍、文献、藩札、富札、手紙、切手、民具などの収集と併行しておられる事が多く、むしろ引札は収集の傍系におかれている方が多いように見受けられた。

その事は引札の宿命的な立場をも感じさせるものである。

### 4. 引札の年代区分と考証

北陸地域の引札そのものの歴史は、古いもので藩政末と見られるが、その残存は極めて少い。

その大部分は明治期であり、特に明治中・後期に盛行した石版印刷期に量のピークを形づくっている。

正確に年代区分をすることは、各期の重合があって困難だが、調査したものによるあらしみの区分をすれば次のようになる。

1. 藩政末～明治初期(明治4、5年まで)  
小型の木版摺、大型縦長びら

2. 明治初期～中期（明治21、22年まで）金沢の場合は、行政区小画制～全地域一区制の期  
 小型木版摺（開店披露など）、大型木版摺（正月用引札）  
 大型、小型曆（絵入り）
3. 明治中期～後期、金沢など市制施行（明治22年4月1日）後  
 大型、小型木版摺、引札、曆、賀状など  
 大型、小型、変型、石版、銅版印刷による引札、曆など  
 びらは現在のポスター風に変貌してゆく。

4. 大正、昭和  
 類似のものは、前期に引きつづいて使われてはいるが、かつての錦絵風から脱して、写実的な画風に変化してゆき、木版摺の味わいから程遠いものとなる。特に曆は、旧形式のものから、カレンダー、日めくり形式のものへと転化する。例外として、第二次大戦後においても回顧的に旧形式のものが少量作られている。

引札の大きさは、区分のために便宜的に、大型小型としたが、和紙木版摺の頃は、桎の全紙・二ツ切が大・小であり、さらに薄様紙を細分したものも多い。洋紙になってからも大きさは、ほぼ踏襲している。

引札は横構図のものが多く、曆は縦構図のものが多い。下記の寸法は横構図のもので示した。

大型 タテ1尺2寸～1尺2寸5厘、ヨコ1尺7寸

小型 タテ1尺2寸、ヨコ8寸2分

変型 タテ2尺4寸、ヨコ8寸（びら型）

タテ1尺3寸、ヨコ3尺6寸

タテ1尺8寸、ヨコ2尺6寸

その他小さいものは寸法様々である。

寸法は用紙仕上り寸法で、摺（刷）面は小さくなるのが普通である。

引札の正確な年代を確定する事は、かなり困難で、今後の研究課題だが、少なくともその手かりは次の諸点から判明し得る。

1. 印刷版式、用紙からの判断。
2. 商店、会社経営者の歴史から。

3. 摺り物処、印刷所名の入ったものは、その歴史より。

4. 人名、地名のあるものは、それらからの判断。

5. 行政区画の時期の明らかなもの。

6. 印刷発行年月の刷込のあるものは、そのまま信頼し得るが、曆以外には数が少い。

7. 電話番号のあるものは加入期が明確。

## 5. 引札のデザイン

石版、銅版が実用段階に入ったのは明治20年代後期だが、北陸地域の引札も木版摺から石版主流へと変わると共に、大正初期まで大流行をした事がうかがえる。現存の三分の二以上を占めている。コストの引き下げと、商家の広告意識の高まりによるものとみられる。石版印刷は当初大都市でまず業として発展し、見本帳をつくって、各地の取次所へ送り注文をとったので、見本帳も残っている。大元印刷所では、発行年月日、住所、身分族、氏名を欄外左側に細字で刷りこんでいるものもある。北陸でも勿論、印刷はかなり行われていた事は残存するものから明らかである。なお大元印刷所の名のあるものはすべて大阪で、それはカレンダー時代になっても、大阪はその印刷の中心として製造した。所謂、刷り込み（後刷り）である。この事は木版摺の頃にも、版元が各種のデザインに番号を附して、注文により摺り込みをした例も見られる。従って異業種が同じデザインのものを使ったものも残っている。

引札のデザインの題材による頻度は表1である。約400枚のものであり、当時の状況のすべてをつくしているとは考えられないし、北陸地域の当時の産業状態も考慮しなければならないが、ほぼ傾向を判断することが出来よう。

引札のデザインは、当時の大衆の嗜好によるものか、或は永年の習慣的な使用によって無難なものになったのかは判断し難いところである。

デザインにみられる特徴的な点は

1. 福神関係、特に恵比寿、大黒天の多用で、ポーズや附随物を変えて登場する。他の福神も登場するが、比較にならない。
2. 福助も少くないが、一般的に、様式化がつよ

テ	マ	枚数	テ	マ	枚数	テ	マ	枚数
恵比寿・大黒天をテーマに <small>(阿彌す ストには、鶴・国旗・婦 人・富士・寿老人など)</small>		29	えびの図		1	舞踊		1
恵比寿を主に <small>(鶴・松・富士・松竹梅 などが加わったもの)</small>		8	ぼたん <small>(唐獅子・ぼんちえ 風・松梅・婦人)</small>		10	もちつき		1
大黒天を主に <small>(木俵・鶴など)</small>		14	菊		3	豆まき		2
七福神 <small>(恵比寿・大黒天・毘沙門天・ 弁財天・福禄寿・布袋・寿老人)</small>		6	松		1	幻燈をみる家族		1
五福神		1	梅		1	正月福うり		1
弁財天を主に <small>(舟と)</small>		1	椿 <small>(婦人)</small>		1	雪月花双六		1
福神関係計		59	桜		1	古今十二傑双六		1
福助を主に <small>(国旗そ)</small>		12	ひょうたん		1	凧 <small>(電報紙と 信紙と)</small>	家族年中行事など計	23
金時を主に <small>(鶴・婦人・国旗・犬・ 鯉の滝のぼりなど)</small>		5	浦島と乙姫		3	工場の図		1
しょうき		1	養老の滝		4	店頭の図		11
おかめを主に		2	天皇		1	商品の図		3
だるま		1	軍艦		1	仕事風景		3
翁と姫		4	御即位大典図		1	土農工商図		3
天の岩戸		1	皇国三軍図		1	説話		1
神の図		1	戦捷万才 <small>(凱旋・激戦 ・古顔図)</small>		2	大石討入		1
富士・鷹・茄子		5	軍人家族 <small>(二見岩)</small>		1	役者 <small>(歌舞伎場 ・面など)</small>		7
富士を主に <small>(鶴・竜)</small>		4	皇族と軍人		1	殿上人・公家		7
日の出を主に <small>(松・鶴)</small>		3	皇族と戦場		1	能 <small>(舞姿)</small>		1
十二支		1	軍装母と子		1	裸童子		1
鶴 <small>(松・富士・松竹 梅・波・日の出)</small>		13	帝国三軍の図		1	三景		1
にわとり <small>(松竹梅)</small>		2	御題		1	的と矢		1
竜 <small>(虎)</small>		4	船出港		1	盆栽		1
虎 <small>(日の出)</small>		1	帆船		13	大津絵入り		1
鳳凰		1	汽船		1	こもだる		1
鷹 <small>(ぼたん)</small>		6	汽車		3	傘飾		1
犬 <small>(竹・鶴)</small>		2	地図の入ったもの		3	かつを節飾		1
猫		1	婦人・娘 <small>(子供・生花・茶の湯・芸 ・能・梅・正月飾付など)</small>		14	扇面		2
魚		2				大福帳		2
蝶		1				文字主体		14
						模様主体		16

表1 引札に描かれた題材

- く、ポーズの変化などもとりによく、イラスト的な面白さは少ない。
- 十二支そのものの動物をテーマとしたものは以外に少く、竜、鶏、犬など入ったものもあるが、メインテーマという程ではない。迫力のあるものは少い。
  - 日清、日露戦の勝利慶祝、戦意昂揚的な図柄も特徴的で、日本画風な表現で、数図組合せたものに構成力の強いものもある。
  - 木版摺りのものは、錦絵風な伝統を組み入れようとする一貫した姿勢がみられる。
  - 石版刷りのものは表現の自由さは出てきたが、写実性と多彩な色彩に依存した傾向で、大正、昭和期に盛行する美人画ポスターへの移行の源流がみられる。

詳細にみれば、一枚ごとに異ってはいるが、全体を通してみれば、明治を中心とした引札には、良くも悪しくも「引札調」といったものが感じられる。

## 6. 製作者について

藩政期には、公的な摺物のために、彫師、摺師が招かれて、刻摺、製本を専業とする、いわば官用印刷専門家がおり、その未裔も現存するが、当時、当然民需用の必要から、その流れをくむ人々や、その傍流の作業職が、都市にかなり存在していたと推察される。

「皇国地法・金沢区地誌」<sup>(13)</sup>によれば、藩政期(時期不詳)の諸商売に版木師二人とあって、いかにも少いが、同書明治14年頃の民業戸数表では、版木印判彫刻職25戸、活字版摺業5戸、

画工1戸となっている。

明治33年の「富山案内記」<sup>(14)</sup>によれば、同市内に30名の印判版木彫師が連名で紹介されている。当時は印判業と版木彫刻は同業である。

「石川県印刷史」<sup>(15)</sup>によれば、明治元年から44年迄の組合加入者中の創業年表に現われる30社中、調査したものが現れたものは4社にすぎない。組合未加入であるのは、規模の零細と、組合意識の薄い業態であったのではないかとみられる。

いづれにせよ、明治初期、中期には、木版摺りの高度な技術をのこしており、絵師は必要に応じて原面を描き、刻摺職が完成したものである。刻摺職は版元を兼ねていたと考えられるが、その営業形態や規模については不明な事が多く、今後の研究にまつところである。

調査したものの中に、何らかの形で摺(刷)所、摺師と見なされる摺りこみのあったものは、下記の通りである。主として引札を中心としたものである。なお年代、順序は不同で、「何々堂」という名称は比較的によく使われたものを便宜的に代表名としたにすぎない。紙幅の都合で、詳細な記入例を除外した。詳細は筆者編著「金沢の引札」<sup>(16)</sup>を参照されたい。

近広堂、山下本舗、有文堂、大村印刷、生智堂、松岡堂、有芳堂、川俊店、文集堂、松田政太郎、秋菊堂、北魁堂、信清堂、栄盛堂、千字堂、好佳堂、紺谷末吉、栄山堂、判徳、光文堂、小栗北陸館、春嘉商店、吐雲堂、吉尾印刷、高見清平、小泉為次郎、岡本外二、熊本甚四郎、塩谷印刷所

以上35店舗であるが、「石川県印刷史」芝居関係資料（金沢大学教授福田福夫氏蔵）には明治20年前後の版木師として次のものが紹介されている。

中町喜広堂、肖応堂、コシムラ、三才堂、立志堂、尾張町三星堂。

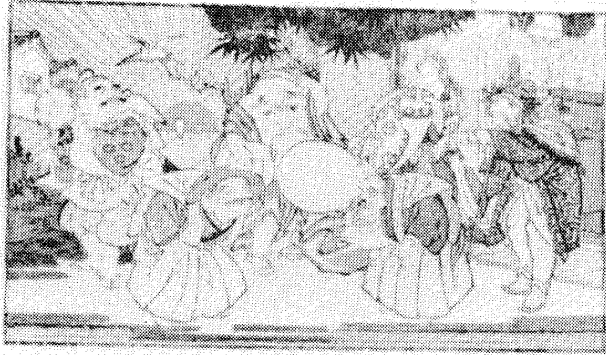
資料を調査させていただいた方々は、二十数氏になり、御名前を掲げられないが、厚く御礼を申し上げたい。

## 註

- (1) 新村出編「広辞苑」（1955）  
大槻文彦編「大言海」（1932）
- (2) 増田太次郎「引札絵びら錦絵広告」誠文堂新光社（1975）
- (3) 田村栄太郎「江戸時代の町人の生活」雄山閣（1966）  
内川芳美編「日本広告発達史・上」電通（1976）  
など
- (4) 松宮三郎「江戸の看板」東京看板工業協同組合（1959）  
林美一「江戸看板図譜」三樹書房（1977）
- (5) 手柄岡持「後はむかし物語」（1718・享保3年）「燕石十種第一」国書刊行会（1911）
- (6) 加藤曳尾庵「我衣、卷一上」日本庶民生活史料集成第十五巻、三一書房（1971）
- (7) 根岸守信「耳袋」金沢市立図書館蔵写本〈大木口哲大阪屋平六五十嵐狐膏薬江戸見世最初の事〉の項。岩波文庫「耳袋、卷一」
- (8) 松本剛「広告の日本史」新人物往来社（1973）
- (9) 鶴月洋「広告文の歴史」日経新書30、日本経済新聞社（1965）  
日本風俗史学会編「日本風俗史辞典」広告宣伝の項（内川芳美）弘文堂（1979）
- (10) 註8に同じ。
- (11) 宮竹外骨「文明開化第二篇広告篇」羊狂堂（1925）
- (12) 福井市益永茂三郎氏の教示による。
- (13) 「石川県史資料近代篇(1)復刻、皇国地誌・加賀国金沢区地誌貳・石川県治金沢市街」（1880）
- (14) 浅地倫編「富山案内記」滝本文亀堂（1900）
- (15) 石川県印刷工業組合「石川県印刷史」（1968）
- (16) 森嘉紀編「金沢の引札」文一総合出版（1979）

## 参考文献

- 金沢市史編さん審議委員会編「金沢市史（現代篇）上」（1969）  
牧久雄編著「金沢商工会議所七十年史」（1960）  
高瀬重雄「越中の絵図」巧玄出版（1975）  
小野忠重「版画の歴史」東峰書房（1954）  
渡辺素舟「日本広告デザイン史」技報堂（1976）  
金沢市役所編「福本金沢市史風俗篇第一」（1973）  
田中喜男「わが町の歴史・金沢」文一総合出版（1979）  
豊田武監修「金沢図屏風」文一総合出版（1977）  
「日本新聞広告史」日本電報通信社（1940）

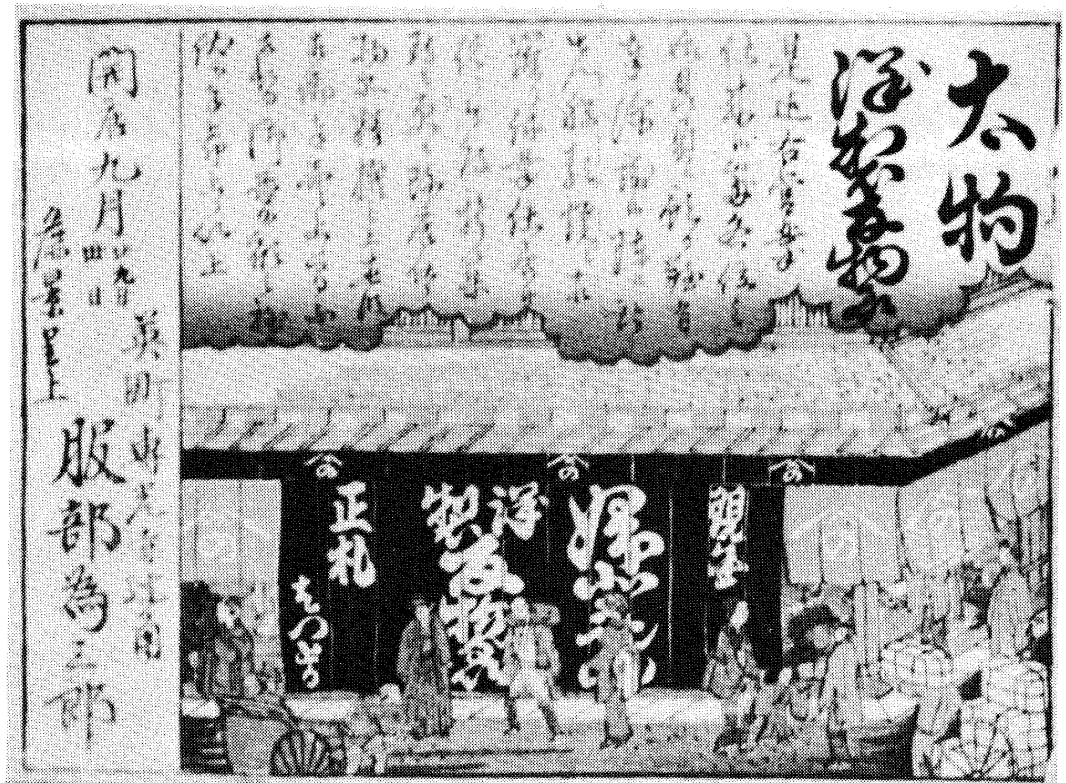


△木版，料亭，木版が精緻（明治22年）



△木版、びんつけ、ローソク店、福神のイラストの暦（明治18年）

▷木版、太物店、新築案内、店頭の様が面白い



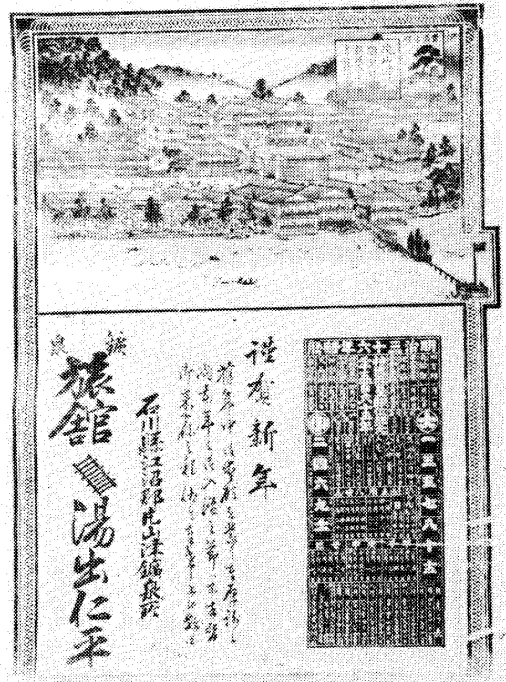


△呉服商 えびすこ売  
▽呉服商 えびすこ売



△麻芋商、銅板+木板、めでたい図柄

▽てま餅、つき廻り引札、福神のもちつき木版



▷ 鉱泉旅館、イラストは温泉場の景(明治36年)

◁ 料亭案内蓮めし初売、木版